

〈論文〉

英語と日本語の非完結相と法性の解釈

The Interpretation of the Imperfective and Modality in English and Japanese

西山 淳子
NISHIYAMA Atsuko
(和歌山大学教育学部)

2023年7月28日受理

Abstract

The English progressive and the Japanese *te-i-* are both considered to be imperfective aspects. However, unlike the English progressive, the Japanese *te-i-* can be interpreted as counterfactual when it appears in *-sentences*. This paper explores how this interpretation can be achieved through an invited inference, specifically the conditional perfection inference.

1. はじめに

英語では、現在進行形を使って、現在進行中の動作を表し、現在形で現在の習慣を表すことが出来る(例文(1)-(2))。英語の進行形は、文法カテゴリーとしてのアスペクト(相)と捉えられ、(3)に示すように、現在時制を表す屈折辞-sなどの定表現をとり除いた動詞とその項で記述される記述事象に付加され、事象の時間構造に関わる意味を付け加える。

- (1) Ken is smoking a cigarette.
(2) Ken smokes.
(3) [時制[相[Ken_smoke_a_cigarette]]]

事象の時間的構造に関わる意味とは、記述事象を時間軸上に置いたときに、記述された事象の始点—中間—終点のどの部分の存在が主張されているか、あるいは、どのように記述事象が時間軸に差し出されているか(反復など)を表す。時制は、そのように差し出された事象を、発話時を中心とする過去から未来へ続く時間軸に位置付ける。

英語の進行形では、事象は終点を含まず、非完結となり、典型的には、その名称の通り、進行中であると解釈され、進行相と呼ばれる¹⁾。

上記の例(1)で、進行形が表示する進行相は、Ken_smoke_a_cigaretteという一塊として捉えられる事象が、時制が示す時間に未完結であるということを表示する。そして、現在時制が未完結の状態を発話時に位置付ける。

通言語的には、動詞の形態で表示される非完結相(imperfective)²⁾が、しばしば進行相と習慣相³⁾に相当

する両方の解釈を持ち(Comrie 1976)、多くの言語で進行相と習慣相は同じ形式で表される。例文(4)と(5)はそれぞれギリシャ語とイタリア語の例であるが、動作の進行と習慣の意味に加え、(6)に示すように、同じ非完結相(-IMP)の形式で、反事実的意味用法を持つことも通言語的に可能である(Iatridou 2000, Ferreira 2016)。

(4) ギリシャ語

eperne to farmako
take-PST-IMP the medicine
'He was taking the medicine.
'/He used to take the medicine.'

(5) イタリア語

Gianni fumava.
Gianni smoked-IMP
'Gianni was smoking/Gianni used to smoke.'
(PSTは過去形、IMPは非完結相の形であることを指す)

(Ferreira 2016)

(6) ギリシャ語

An eperne afto to siropi θa γ_1 inotan
if take-PST-IMP this syrup FUT become-PST-IMP
kala.
well
'If he took this syrup, he would get better.'
(FUTは未来時制、
 γ_1 は前舌母音の直前の有声軟口蓋摩擦音)

(Iatridou 2000)

日本語でも、例文(7)-(10)で示すように、非完結相の意味を表すとされる同じ「テイル」形で、(7)と(8)は現在進行中の動作、(9)は結果、(10)は習慣の意味を表している。

- (7) ケンは今走っている。
 (8) ケンは今家を建てている。
 (9) ケンが今あそこに倒れている。(Ogihara 2020, 他)
 (10) ケンは毎日走っている。

一般的に、非完結相の中で、進行相と習慣相の形式が異なる場合は、反事実の意味は習慣相の形式に現れる傾向があるとされる(Bonomi 1997, Ferreira 2016)。英語はこの例に当たると思われる。また通言語的に非完結相が反事実的条件文に現れるとされる(Iatridou 2000)。ギリシャ語の例がこれに当たる。

次の日本語の例(11)-(12)では、「たら」文の帰結節に非完結相を表す「テイル」や「テイタ」の形式が使われ、反実仮想、または、反事実の解釈が得られることが観察されている(有田 2019, 他)⁴⁾。

- (11) 今お金があったら、私は新しいバッグを買っている。
 (12) あの時お金があったら、私はそのバッグを買っていた。(有田 2019, 他)

一方、英語の進行形を使った条件文(13)-(14)は反実仮想の意味を表すことができず、特に(14)は容認性が著しく下がる。反実仮想を表すためには、(15)-(16)のように、Ifの条件節では過去形や過去完了形が使われ、帰結節では法助動詞wouldが使われる。

- (13) If I have money, I am buying a new bag.
 (14)*If I had money, I was buying a new bag.
 (15) If I had money, I would buy a new bag.
 (16) If I had had money, I would have bought a new bag.

つまり、英語では、「進行」や「習慣」や「反実仮想」の意味が、それぞれ進行形(=(1))、現在形(=(2))、法助動詞(=(15)-(16))という異なる形式で表されているのに対し、日本語では「テイル」形で表されている((7)-(12))。

本稿では、英語の進行形とそれに相当する解釈を持つ日本語の「テイル」形を比較・対照し、特に英語で法助動詞で表現される「反実仮想」の法性の解釈が、どのように日本語の「テイル」から生じ、なぜ英語の進行形から生じないのかについて考察する。

2. 進行相の様相論理

英語の進行形、つまり英語の進行相の意味については、Portner(1998)がKratzer(1981)の様相基盤(Modal Base)と順序源(Ordering Source)による法性の分析を利用してDowty(1979)の慣性世界(inertia worlds)を捉え、それを進行形の意味分析に応用している。

定義(17)と(18)で示すように、様相基盤(Modal Base ($M(\cap M(w))$))は、特定の文に関連のある命題の基本的な集合からなる世界で構成され、順序源(Ordering Source)は、命題の集合から成る世界で、特定の文がよりよく当てはまるように順序づけられたものである。

- (17) $M(\cap M(w))$: a baseline set of worlds relevant to the interpretation of the sentence
 (18) Ordering Source ($<_{o,w}$): an ordering of the worlds in $\cap M(w)$ according to how well they fit with the propositions in $O(w)$ (Portner 1998)

例文(19)のような英語の進行形文をとらえる様相基盤(Modal Base)は状況的様相基盤(Circumstantial Modal Base)とされ、(20)のように「7時にメアリーがトビー山に登っていた」という解釈に関連のある命題の基本的な集合から成る世界から構成されている。例えば、「メアリーは体調が整っていた。」「7時に軽く雨が降っていた。」「メアリーは7時にトビー山の3分の1のところにいる。」などの命題から構成されている。

- (19) At 7 o'clock, Mary was climbing Mount Toby.
 (20) $M(w) = \{ \text{'Mary is in good physical condition', 'Mary does not give up easily', 'It was raining lightly on Mount Toby at 7 o'clock', 'Mary was one third of the way up the Mount Toby trail at 7 o'clock', 'Mary was headed the right way on the trail at 7 o'clock',...} \}$ (Portner 1998)

さらに、進行相の意味に関わる順序源(Ordering Source)は、(21)のように、文で表された事象の完結が妨げられない外的条件の全ての命題の集合である。たとえば、(19)の進行形の文の記述事象(メアリーがトビー山に登ること)が真となるためには、「メアリーがクマに食べられない」こと、「メアリー滑って足首を傷めない」こと、「突然の夏のブリザードがトビー山を襲わない」こと、「メアリーが道に迷わない」こと、といった命題が成立する必要がある。

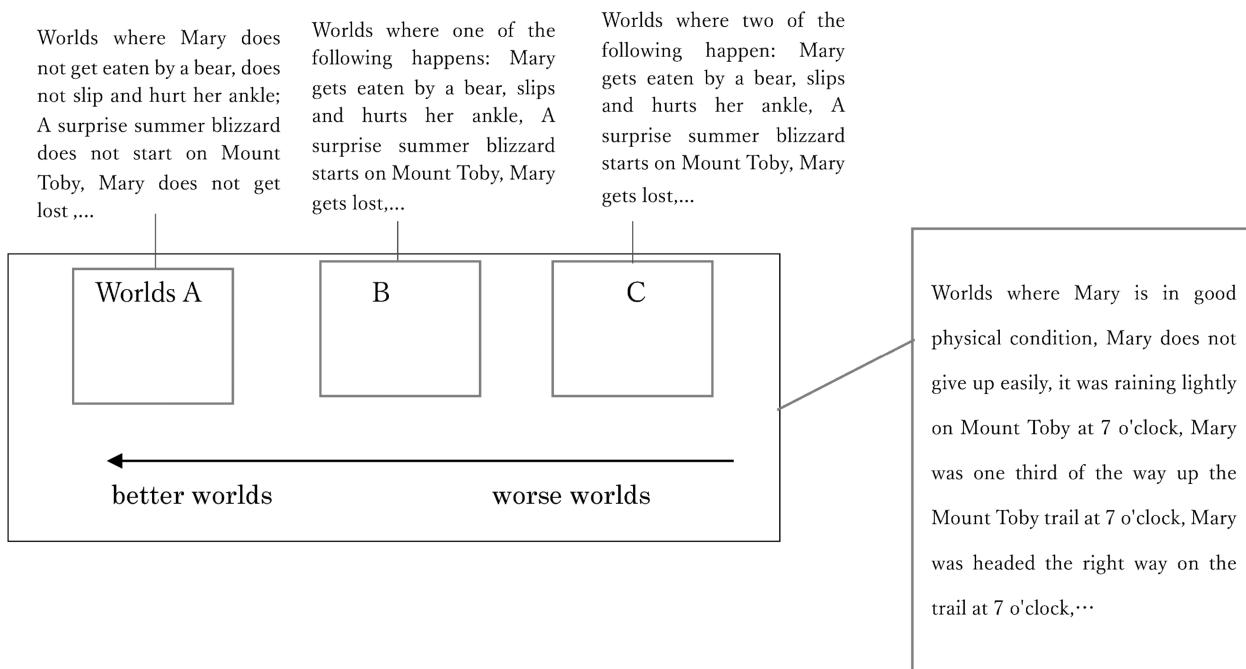


図 1 例(19)がより成立するより良い世界(Portner 1998)

(21) $O(w) = \{ \text{'Mary does not get eaten by a bear'}, \text{'Mary does not slip and hurt her ankle'}, \text{'A surprise summer blizzard does not start on Mount Toby'}, \text{'Mary does not get lost'}, \dots \}$ (Portner 1998)

進行形については、事象が完結する前の進行中の状態を表すため、例(19)では、7時の時点で事象が進行中であっても、次の瞬間にメアリーは滑って足首を傷めて、登山を断念するかも知れない。したがって、(19)が言えるためには、(21)の順序源がより多く成立するより良い世界であることが必要となる。上記の図 1 は例文(19)が真となるための最善の世界を表す。

Portner (1998) に従って、(20)にあげた状況の様相基盤を $Circ(e)$ 、(17)の事象が妨げられないことを断言する命題の集合を $NI(e)$ 、最もよい最善の世界を $Best(Circ, NI, e)$ とする。下の(22)はPortner (1998) による定義である。

(22) $Circ(e)$: the set of circumstances relevant to whether e is completed

$NI(e)$: the set of propositions which assert that e does not get interrupted

$Best(Circ, NI, e)$: the worlds compatible with what's going on up until 7 o'clock (those in $\cap Circ(e)$), in which she is not interrupted (ideal with respect to $\langle NI, e \rangle$)

そして、Portner (1998) は英語の進行形の意味を(23)のように定義する。

(23) $PROG(\Phi)$ is true at a pair of an interval and world $\langle i, w \rangle$ iff there is an event e in w such that $T(e) = i$ and for all worlds w' in $Best(Circ, NI, e)$, there is an interval i' which includes i as a nonfinal subinterval, such that Φ is true at $\langle i', w' \rangle$. (Portner 1998 : 774)

単純化して言い換えると、進行相の事象 e は、状況の様相基盤 $Circ$ と、事象 e が妨げられない条件の命題の集合 NI を満たした最善の世界で真となる事象 (Φ) が完結する終わりの時間を含まない部分事象 (e) を表す。($T(e)$ は事象 e の時間痕跡を示す。)

3. 結果相を含む進行相の様相論理

さて、1節の例文(7)-(9)で示したように、日本語の「テイル」は進行相の解釈に加えて、結果相の解釈も持つが、英語の進行形と同様、Kratzer (1981) のモダリティの概念、つまり、状況の様相基盤と順序源に基づいて、Dowty (1979) の慣性世界を捉えて、意味を定義することが可能である。

有田 (2019) は、「テイル」の「テ」の意味を非完結演算子 (imperfective operator) とした Nishiyama (2006) の「てい(る)」の分析を援用し、「シテイル」形を次のように定義している。

(24) 「シテイル」形の意味

a. シテ形は動詞の表す全体事象 (e) の部分 (e') を

取り出す。その際、

- i) e' の事象時 $\tau(e')$ は、 $s(e) < \tau(e')$ であるものとする。
- ii) 事象 e は、すべての慣性世界においてその事象を最大に取るものとする(有田 2019,30)。

有田(2019)は、取り出される部分事象は記述される全体事象 e の始点となる時間 s を含まないとする。そして、ii)の慣性世界を、Nishiyama(2006)は、「事象 e が完結するかどうかに関わり(状況の様相基盤、事象 e が妨げられない(NI)すべての世界(=Best(Circ, NI, e)))」としている。つまり、テイル文(25)を例にとると、状況の様相基盤CircとNI(妨げられない命題)は、それぞれaとbようになる。

(25) ケンはセーターを編んでいる。

- a. Circ(e) = {ケンは毛糸や編み棒を持っている、ケンはセーターの編み方を知っている、ケンはセーターを半分編んだ、ケンは途中で物事を投げ出さない、…}
- b. NI(e) = {ケンは電車の中に編みかけのセーターを置き忘れない、洪水で家が流されない、セーターの編み方がわからなくなならない、ケンが毛糸を買うお金が無くならない、飼い犬に破損されない、ケンは編む時間が無くならない、ケンが編むのが嫌にならない…}

有田(1999)では、「イ(ル)」を状態化オペレータとする Nishiyama(2006)、Takubo(2011)に準じ、Nishiyama(2006)と同様、「テイル」の進行相の解釈も結果相の解釈も、事象の部分を取る「テ(シテ)」の非完結相の意味と状態化の「イ(ル)」の意味の組み合わせで説明することができるとしている。また、例文(10)や(11)-(12)のような習慣や反実仮想の解釈についても、同様に得ることができ、「テイル」そのものに反実仮想の意味があるわけではないと論じている。また「タ」形の例(26)でも「反実仮想」の解釈が得られることを指摘している。

(26) この仕事が出来れば、明日は釣りに {行っただき/行くさ。}

発話の容認性に幅があるとしても、(26)のどちらの形式でも「反実仮想」の解釈は可能となる。有田(2019)は、いずれの例においても、「テイル/テイタ」「スル/シタ」そのものが、「反実仮想」の意味を持つわけではないことは自明としている。しかし、どのように「反実仮想」

の解釈が生じるかについては議論していない。

4. 条件付き完全性(Conditional Perfection)効果

日本語では、しばしば「反実仮想」の意味を明示的に示す際には、「のに」「のだが」といった終助詞を付加する。例文(27)と(28)は、それぞれ「ル/タ」形と「テイル/テイタ」形に付加され、「反実仮想」の解釈が明示的に表現されている。

- (27) 晴れていたなら、満天の星空が見える/見えたのに。
- (28) お金があったら、新しいバッグを買っている/買っていたのに。

ここから「のに」を取ると、(27)も(28)も、文脈によって、通常条件文の解釈となるようだ。

これらの文は英語のif条件文に対応するが、英語では例(14)-(15)で示したように、「反実仮想」の解釈を明示するために、wouldなどの法助動詞を使用する(29)-(30)。

- (29) If I had money, I would buy a new bag. (=14)
- (30) If I had had money, I would have bought a new bag. (=15)

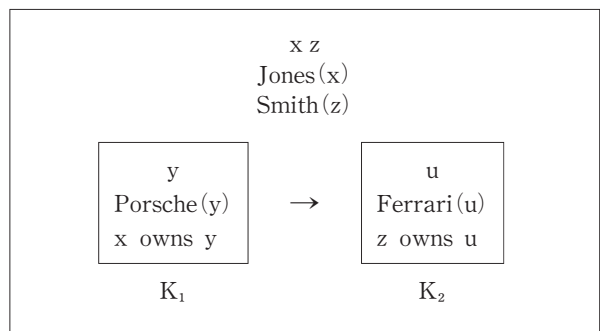
Kamp & Reyle(1993)は、if節を伴う条件文の真理条件的な解釈と日常会話における解釈と間の乖離を論じている。

Ifの条件文‘if A then B’の形式は、談話表示構造では $K_1 \rightarrow K_2$ の形式で書き表すことができる。‘if A then B’のAの談話構造が K_1 、Bの談話構造が K_2 となる。

次のif文(31)を談話表示構造(DRS)で示すと(32)のようになる。

(31) If Jones owns a Porsche then Smith owns a Ferrari. (Kamp & Reyle 1997, 158)

(32)



談話表示構造(32)で示されるように、談話指示 y, u はそれぞれ、 K_1 と K_2 の中にあり、両者の間に依存関係がない。これは論理包含(material conditional)と言われ、

K_1 と K_2 はそれぞれ前件と後件に当たる。そして、真理条件的に(33)に相当する意味となる。

(33) Either Jones does not own a Porsche or Smith owns a Ferrari. (Kamp & Reyle 1997, 159)

しかし、Kamp & Reyle(1997)が論ずるように、日常会話では、このような事実に基づく(factual)真理条件的な解釈よりも、前件と後件の内容の間や、談話指示間に依存関係が見られることの方が多くのように思われる。

Geis & Zwicky(1971)は、例(35)と(36)をあげ、If A, then Bの形式の文は、(37a)のような論理包含として厳密に解釈されるのではなく、多くの話し手と聞き手に(37b)のような推論を誘引すると論じている。

(35) If John leans out of that window any further, he'll fall.

(36) If you mow the lawn, I'll give you five dollars.

(37) a) $p \rightarrow q$ (pは前件、qは後件の命題)

b) $\neg p \rightarrow \neg q$ (\neg は否定：pでないならqではない)

c) $p \leftrightarrow q$

このような推論をHorn(2000)は条件付き完全性推論(Conditional perfection inference)と呼び、(37c)のように解釈されるとしている。つまり、(38)のように、if形式からiff(if and only if)形式として推論され、解釈される。

(38) If and only if you mow the lawn, I'll give you five dollars.

(If you don't mow the lawn, I won't give you five dollars.)

5. 非完結相と反事実の解釈

1～3節では、英語と日本語の非完結相に相当する進行形と「テイル」形の意味を、Kratzer(1981)の状況の様相基盤と順序源に基づいて捉えた慣性世界で真となる全体事象の部分事象を導入するものとして定義した。

有田(2019)では、反実仮想の解釈は、「イ(ル)」による状態化を経て、その状態の解釈から反事実の解釈が得られるとした。

ここで、再度、反事実の解釈が得られる例を検討してみたい。日本語の例(11)-(12)(= (39)-(40))では、「タラ」節が前件、「テイル/テイタ」節が後件となる。

(39) 今お金があったら、私は新しいバッグを買っている。

(40) あの時お金があったら、私はそのバッグを買ってい

た。

(39)の後件の記述事象「新しいバッグを買う」は非完結演算子「テ」により、(真)部分事象を導入する。非完結相は、全ての慣性世界で真となる全体事象に基づいて定義される。その慣性世界を形成するのは、状況の様相基盤と順序源による最善の世界の集合である。(39)の後件の状況の様相基盤(Circ(e))と順序源(NI(e))は(41)に示す。

(41) Circ(e) = {バッグを買うお金がある、新しいバッグを売っている、買い物をする事ができる、...}

NI(e) = {財布を落とさない、バッグが売り切れていない、店が閉まっていない、途中で雷に打たれない、財布を盗まれない、店に強盗が入らない}

(41)のCirc(e)の集合が示すように、(39)と(40)のテイル・テイタ形の文では、「バッグを買うお金がある」という状況の様相基盤Circ(e)に含まれる命題がif節を形成している。後件の命題「バッグを買っている」が成立するためには、状況の様相基盤の全ての命題が真とならなければならない。そのため、「バッグを買うお金がある」という命題が偽と判断された時点で、条件付き完全性推論が誘発され、聞き手は「バッグを買っている」が偽であり、反事実であると推論する。つまり、前件と後件の内容は互いに関連し、必然的に依存しているのである。

しかし、if条件文や「たら」文で繋がれる二つの命題に関連性がみられない場合、推論は誘発されない。次の例(42)では、前件と後件の二つの命題(「お腹が空いている」と「冷蔵庫にプリンが冷えている」)の間に依存関係はみられない。

(42) もしお腹が空いたら、冷蔵庫にプリンが冷えているよ。

(43) Circ(e) = {冷蔵庫がある、プリンが入っている、冷蔵庫の電源が入っている、プリンは冷えるぐらい前に入れた、...}

NI(e) = {冷蔵庫は壊れていない、冷蔵庫のドアを頻繁に開けていない、プリン容器は壊れていない、プリンは食べられていない、プリンがひっくり返っていない、...}

(43)が示すように、例(42)の後件の成立に必要な状況の様相基盤や順序源の命題の集合にも「お腹が空いている」は含まれないため、論理包含と解釈し、お腹が空いて

いようが、空いてまいが、プリンは冷えており、事実の解釈は生じない。

さらに、日本語「テイル」形の非完結演算子「テ」は事象記述を満たす事象の(真)部分事象を談話に導入する(Nishiyama 2006)。そして、Krifka(1998)の定義する事象構造に従い、そこで導入される部分事象は空の事象であってはならない。つまり、事象の部分が存在することが「テイル」文では断言されるため、その存在が事実と照らして偽となる場合、語用論的に反事実の解釈につながる⁹⁾。

一方で、英語の進行形の意味は、Dowty(1979)やPortner(1998)に基づく慣性世界で事象記述を満たす事象の、その終点(end point)を含まない(真)部分事象が存在するような事象の全体が慣性世界で真となることを要件とし、現実世界で実際の事象の部分の存在が主張されているわけではない。

つまり(44)(=13)で前件が偽と判断されようがされまいが、後件の真偽は現実世界の実事ではなく慣性世界で判断される。それゆえ、事実に基づいて偽と判断することができないため、日本語の(39)-(40)の「ている」文に相当するif条件文であっても、英語の進行形では、反事実の解釈が生じない。

(44)(=13) If I have money, I am buying a new bag.

6. 終わりに

本稿では、英語の進行形と日本語の「テイル」形の非完結性を定義づける慣性世界のもつ法性が、「テイル」文では条件付き完全性推論を誘発し、反実仮定の解釈を導くことを説明した。この条件付き完全性推論を誘発する語用論的な仕組みについては改めて論ずることとする。

注

- 1) 相(アスペクト)という用語は、時制や法助動詞などと並ぶ文法的なカテゴリーと捉えられるが、語彙の意味に依存する語彙的なカテゴリーとしても使用されることがある。進行形も進行相も、その形態を論ずる場合を除いて、文法カテゴリーを指すことが多く、英語ではどちらもthe progressiveと呼ばれる。本稿では、慣習的に使われている用語に従い、英語の進行形(be動詞+動詞のing形)で表示される文法項目を進行相(the progressive)と呼ぶ。何かが進行中であるというongoingnessの意味・概念を必ずしも指すわけではない。時制、相、進行形の様々な捉え方の変遷についてはBinnick(1991)を参照のこと。
- 2) 完結・非完結相は、ロシア語やギリシャ語などの動詞の完了形・未完了形で表示される文法相の完了・未完了相(the perfective/imperfective)に由来する(Comrie 1976)。ここでは、それら諸言語の文法カテゴリーを前提に、完了形(the perfect)と区別するために、完結・非完結相という用語を使用している。ただし、英語の動詞には完結・非完結に対応する明示的な文法的・形態的な区別がなく、その区別は英語では語彙的アスペクト(Aktionsart または lexical aspect)

(Comrie 1976)となる。英語動詞の語彙的アスペクトに沿った分類としては、Vendler(1957)の分類や日本語動詞については金田一(1950)による分類がある。

- 3) 「習慣相」(「反復相」)や「結果相」も、通言語的に認められる文法範疇を前提とし、「習慣相(反復相)」や「結果相」に相当する意味解釈を持つ表現を捉える用語として便宜的に使用している。前提となる諸言語の文法的相や時制については、Dahl(1985)が詳しい。
- 4) 例文(39)-(40)の帰結節は、発話の文脈から離れるときこちなく聞こえ、「…だろうと思う」や「…のに」が文末に付加された方が容認度は上がる。しかし、適切な文脈とともに、談話の終助詞「よ」などを付加すると「ている」の反実仮定の解釈を維持したまま自然な発話となることが分かる。
- 5) ここでは金田一(1950)の分類による日本語の第4種動詞(「建物が聳えている」など)や、Talmy(2000)で fictive motion(「山道が走っている」)と捉えられるような仮想的な事象は議論しない。そして、i)のように、if節を伴わない単純過去形の「タ」文で置き換えた時、過去の事象の存在を断言することが可能な事象記述に「テイル」が付加された場合に限ることとする。
 - i) 私は新しいバッグを買った。

参考文献

- 有田節子 (2019) 「スル・シタ・シテイルの意味をめぐる3つの問い」『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す1』(編) 庵功雄、田川拓海 東京:ひつじ書房. 25-52頁.
- Binnick, R. I. (1991). *Time and the Verb: A guide to tense and aspect*. Oxford: Oxford University Press.
- Bonomi, A. (1997). Aspect, quantification and when-clauses in Italian. *Linguistics and Philosophy*, 469-514.
- Comrie, B. (1976). *Aspect*. Cambridge University Press.
- Dahl, Ö. (1985). *Tense and Aspect Systems*. New York: Basil Blackwell.
- Dowty, D. R. (1979). *Word Meaning and Montague Grammar*. Dordrecht: D. Reidel Publishing Company.
- Ferreira, M. (2016). The Semantic Ingredients of Imperfectivity in Progressives, Habituals, and Counterfactuals. *Natural Language Semantics*, 24, 353-397.
- Geis, M. L., & Zwicky, A. M. (1971). On invited inferences. *Linguistic Inquiry*, 2(4), 561-566.
- Horn, L. R. (2000). From if to iff: Conditional perfection as pragmatic strengthening. *Journal of Pragmatics*, 32(3), 289-326.
- Kamp, H. & Reyle, U. (1993). *From Discourse to Logic*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Kindaichi, H. (1950). Kokugo Dooshi to Ichibunrui. *Gengo kenkyuu*, 15, 48-63.
- Kratzer, A., Eikmeyer, H. J., & Rieser, H. (1981). The notional category of modality. *Formal Semantics: The essential readings*, 289-323.
- Krifka, M. (1998). The origins of telicity. In *Events and Grammar* (pp. 197-235). Dordrecht: Springer Netherlands.
- Iatridou, S. (2000). The Grammatical Ingredients of counterfactuality. *Linguistic Inquiry*, 31(2), 231-270.
- Nishiyama, A. (2006). The Meaning and Interpretations of the Japanese Aspect Marker -te-i-. *Journal of Semantics* 23,185-216.
- Ogihara, T. (2020). Aspect and thematic roles. *Journal of Semantics*, 37(1), 83-115.

Portner, P. (1998). The progressive in modal semantics.
Language Vol.74, No.4, 760-787.
Talmy, L. (2000). *Toward a Cognitive Semantics: Concept*

structuring systems (Vol. 1). MIT press.
Vendler, Z. (1957). Verbs and Times. *The philosophical review*,
66(2), 143-160.